



『関西企業ヒストリア』

～その強さの秘密・転換点を探る～

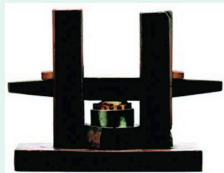
創業から70年以上の歴史を重ねる会員企業を取りあげ、時代の荒波を乗り越えて、長い期間にわたって生き残り成長してきた強さの秘密、その歴史の転換点を探ります。

第30回 創業 1892年(明治25年)

岡村製油 株式会社

河内で生まれた 綿実搾油の岡村製油

1892年▶ 岡村製油は1892年3月、綿実の搾油事業を開始しました。日本の木綿史は、799年頃に三河国に漂着した天竺(インド)の青年が、綿の種をもたらしたのが起源とされています。その後、九州を中心に綿作が始まりましたが、気候風土の問題から、90年ほどで途絶えたと言われています。



しめ木

再び木綿が渡来し、安土桃山時代から畿内や三河を中心に綿作が盛んとなりました。これがおおよそ明応・永正年間(1492～1520年)の出来事です。現在岡村製油が立地する大阪府柏原市、近隣の八尾市、東大阪市にまたがる「中河内」と呼ばれる地域は、江戸時代の中頃から綿花の栽培が盛んになり、特産品である「河内木綿」を産出するまでになりました。軽くて温かく、丈夫な木綿の人気は全国的なものとなりました。一方、国内最大の消費地であった江戸でも、元禄時代以後から木綿の需要が急増し、周辺の武蔵、上野、下野、常陸、甲斐では綿作農家が生まれ、生産量は大幅に高まりました。これと連動し、綿を繰り終えた後の種子から搾油される綿実油も普及していきました。

創業当時の岡村製油では、動力源として水車が重要な役割を担っていました。その動力で石臼を回して綿実を挽き割り、さらに殻を外した後の核を粉碎する時の胴突きにも水車を利用していました。

粉碎した核(ミート)を蒸し、搾油は楔を打ち込んで締め上げ搾り出す「しめ木」という道具を使用していたことが、当時の記録に残っています。

搾油能力、作業効率、油や油粕の歩留、製品の品質など、今日とは比べようもない極めて原始的な工場からのスタートでした。



上：社屋玄関脇に置かれた石臼。今は刻みが浅くなっている。

右：柏原市安堂の村にあった八尺の水車。奥の建屋の右側に水車が見える。



困難を極める原料調達

1960年▶ 近隣の綿実を当てに創業した岡村製油でしたが、その供給は長くは続きませんでした。国内の綿花栽培はすでに衰退期にさしかかっており、国産の綿実を原

料として搾油できたのは創業から10年余りのことでした。

その後は、世界各地から原料を調達せざるを得なくなりました。1960年代の前半はニカラグアを中心に中米から、後半から1970年代半ばにかけてはアフリカの諸国から主に原料を調達しました。1985年前後から1990年までは中国が、それ以降はオーストラリアやブラジルが主な供給先になりました。これまでに綿実を輸入した国は43か所にもものほります。



旧搾油工場



ポイント
転換点

綿実搾油を続けるため 新規事業への着手開始

1967年▶ 経営の悪化や原料供給先確保の困難により、綿実搾油事業継続の危機を経験した同社は、綿実の搾油の際に発生する殻を原料として、1967年にキシロースの製造に着手しました。キシロースは、アミノ酸と反応して食品の焼き色を強調したり、フレーバーを改良したりする効果が認められている食品添加物です。

度重なる実験や徹夜での作業を何度も繰り返し、ついにキシロースの事業化に成功しました。イギリスへの輸出契約が決まってから、わずか数か月のことでした。

高品質のキシロースはイギリス企業の信用を得て、キシリトールの原料として医薬メーカー向けの販売が拡大、輸出量を順調に伸ばしていきました。さらに食品添加物としての需要もあり、1996年の製造終了までの間、最盛期には月間生産量が50トンを上回ることもありました。また売価も高く、その頃収益が不調であった綿実の搾油事業に代わる大きな収益源となりました。

1971年からは二塩基酸事業の研究開発にも着手しました。元々油脂精製の副産物から脂肪酸を製造販売していましたが、収益は小さく、成長性の乏しい事業でした。脂肪酸は長い炭素鎖と1つのカルボン酸から構成されていますが、ここにもう一つカルボン酸を増やす事で、新しい商品となるとの発想から二塩基酸の開発がスタートしています。

岡村製油の二塩基酸（ジカルボン酸）はこれまでの天産品ではなく石油化学合成品で、独自の合成方法を編み出し、オンリーワン商品を数多く提供してきました。同社の製品は、長い炭素鎖が最大の特徴であり、多様なニーズに応えるためさまざまなバリエーションを取り揃え、現在では世界中のユーザーに販売するまでに成長しました。半世紀にわたる実績と経験をもとに、これからもお客様に新しい製品を提案し続けていきます。

最盛期には、日本国内で20社以上が綿実の搾油事業に携わっていましたが、原料の供給が不安定なこと、十分な利益が見込めないことなどの理由から1社、また1社と撤退が続き、今日では岡村製油のみが綿実の搾油を続けています。キシロースと二塩基酸、これら二事業の成功がなければ、国内の綿実搾油は消滅していたと言っても過言ではないでしょう。

「コットンドリーム」 —あくなき綿実への探求

2022年▶ この10余年で、顧客の品質に対する要求が高度になり、これに対応すべく、生産管理システムを構築する必要性に迫られました。同社では、製品の品質管理については国際的にも通用する品質管理システムISO9001を1998年に導入しました。その後、環境問題の観点から、環境の管理システムであるISO14001も取得、運用しています。



綿実サラダ油
高級サラダ油として一流の
レストランや料亭で使用さ
れている。

創業から130年ものあいだ、綿実にこだわり、綿実と共に歩み続けた岡村製油。あらゆる危機や困難に直面しても、綿実を手放すことはありませんでした。綿という植物の神秘を探求することを、同社では「コットンドリーム」と呼んでいます。夢をあきらめないその姿勢は、これからの歴史を紡ぐ同社の若い人材にも連綿と受け継がれていくことでしょう。

創業明治25年

岡村製油株式会社

岡村製油 株式会社

本社所在地：大阪府柏原市河原町 4-5

従業員数：130名 資本金：1億5,000万円

事業内容：綿実油、油粕、リンター、キシロース、高級二塩基酸等の製造・販売